

P. ナトルプと O. ヴイルマンの シュライエルマッハー観について

—主として宗教的観点より—

武 安 宥

「シュライエルマッハーは教育学研究のためにとりわけ「哲学的」基礎を探究したのであったが、この傾向は当時の時代的雰囲気もあり、また彼個人の独自の精神的傾向にも一致していたのであった」と P. ナトルプ自らが明瞭に述べているように、彼の教育学の根底には哲学が厳然として、しかも主要な要素として存在している。P. ナトルプは、プラトン、カントの哲学思想を継承しつつ、独自の「社会的教育学」を提唱して「理性的意志」を強調したが、その大前提として「誰でも今日（1919年）の責任の重い状況の中では、シュライエルマッハーの重いいましめのように、生命がある限り、……どこまでも若さを失わず、……若く新しくするとは永遠化することである……」（ナトルプ 篠原陽二訳『社会的教育学』玉川大学出版部、1983年、27頁）とシュライエルマッハーの思想に生きなければならないことを彼が主張したことも注目すべきことである。

かつて我が国においては所謂「マルブルク学派」としてナトルプの名前が教育学を代表していた（『マルブルク大学』*Die Universität Marburg, 1527, Marburg.*, in *N. G. Elwert'sche Verlagsbuchhandlung, 1977.* にはナトルプについて哲学者としての側面のみが言及されているに過ぎない）。この学派は新カント学派としてカントの哲学に立脚した哲学者の集団を称したのであるが、ナトルプもまた古代ギリシヤの哲学者プラトンと、近代の哲学者として思想界のコペルニクスの

大転換を成し遂げた I. カントに寄りつつ、マールブルク大学を根拠地として主として哲学と教育学を講じ研究をした。その学生生活の中で、国民教育の観点からシュライエルマッハーの教育学について言及した論文がある (Paul Natorp, "Schleiermacher und die Volkserziehung" in *Schleiermacher Philosophie des Glaubens*. Berlin 1910. S. 57-84)

ところで、同じドイツ語文化圏にナトルプとほぼ一回り年長であって、個人的にも交流のあった教育学者で哲学者でもあった O, F, ヴィルマンがいて、ベルリン大学で教育学を講じていた (E. Saupe, *Deutsche pädagogen der Neuzeit*, 1929.)。彼もまた主としてシュライエルマッハーの教育学を古代ギリシアの哲学者アリストテレスと、近代教育学の樹立者ヘルバルトを基盤にしつつ、その上ヘルンフト兄弟団の敬虔主義の宗教的視点に注視しており、特に人格形成の教授内容としての文化的財産に言及した論文がある (Otto. Willmann, *Kleine pädagogische Schriften*, Schöningh. 1959)。

そこで、この両者のシュライエルマッハー教育学研究を (前者の「国民教育」と後者の「教材としての文化的財産」に注目して論及するが、しかし、そこからここでは最終的にシュライエルマッハーの「宗教 (=絶対帰依の感情 = schlechthinniges Gefühl)」に対する両者の態度についてまで論及を試みてみたい。もっとも両者は宗派の立場を異にしているが (P. ナトルプは福音主義信仰に、O. ヴィルマンはローマ・カトリック信仰に信仰の基盤を据えている)、共に宗教教育を人格教育・形成に不可欠な要素と見なしていることに違いはないのである。

(一)

ポール・ナトルプ (Paul, Natorp, 1854-1924) は 1854 年、1 月 24 日、デュッセルドルフで誕生した。この都市は芸術、学術、産業、宗教の諸点で非常に多面的に青少年を力強く刺激した。彼は 1871 年の戦時、17 才でこの都市を後にした時には、精神生活上の様々な拭いがたい諸印象を強く刻印されていた

し、また彼と親しく交友した人々との忘れがたい思い出を胸に収めていた。「多面的な諸特性が彼に留まっていたが、それには常に厳肅な真面目さと非常な熱意とが伴っていた。しかし、また同時に小さなものから大きなもの、千変万化するものへのあの独自の眼差しをも備えて、並行して存在する空き間から多彩な混乱を見分けつつ、表面的に一見すると重要な石ではあるが、全体に組み入れられて輝かしいモザイクを構成しているに過ぎないことを見分けることのできる紛うことなきセンスをも持っている」(Boese)。1871年から1874年まで、彼はベルリン、ボン、ストラスブルク諸大学で研究を続けた。しかし、ベルリンでは心の底から打ち解けることはできなかった。超満員の大講義室での講義は学生と教授との真に親しい結び付きを決してもたらさなかった。彼は間もなくこの大学を去って、ボン大学に行き、ここで古典文献学者ウーゼナー(Hermann Usener, 1834-1905)の指導を受けて古代への眼を開かれた。ストラスブルクでは彼は特に哲学者でありまた教育学者であったエルnst・ラース(Ernst. Laas, 1837-1885)の指導を受けた。彼は批判の巨匠であり、ナトルプは大きな刺激と影響を受けたが、勿論、ナトルプがそれで十分に満足した訳ではなかった。その頃彼は友人の書簡を通してコーエンとランケの著作研究に導かれた。彼はまたニコラウス・クサヌス、コペルニクス、ガリレイ、ケプラー、デカルトの研究をも熱心に行った。彼はマールブルクに赴き、哲学者コーエンと、神学者ウィルヘルム・ヘルマンから親密に指導を受けた。1881年彼はマールブルク大学で哲学教師の資格を獲得し、1885年には同大学の助教授、1892年に正教授に就任してこの職務に忠実に留まり、1921年に一切の講義義務から解放され、1924年70才の誕生日にはマールブルク大学の神学部から名誉博士号の学位を授与されて、1924年8月17日、マールブルクで永眠した。

(二)

ところで、P. ナトルプはシュライエルマッハーの国民教育者としての側面

を主にして論及しているのであるが、その様な考察も「シュライエルマッハー教育学の体系的構造」を理解するためには必要であり、ナトルプも最も重要な一般的諸前提を考察しているので、ここではそのような諸前提に注目してナトルプのシュライエルマッハー理解を検討してみるに留めたい。

まず第一に P. ナトルプがシュライエルマッハーを言わば生まれつきの並外れた教育者と見なしていることは極めて優れた卓見であり、その証拠として 1849 年にプラッツによって初めて出版された『教育学講義』(*Die pädagogische Schrift*) を初め、その他の教育小論文や教育評論は言うまでもなく、彼の主要なほとんどの著作や説教またその他の談話や書簡をも挙げて、それらがすべて彼の教育者の特質を理解するために貴重な資料であると指摘している(ディースターヴェークもまたその『シュライエルマッハーの教育方法論』において彼をソクラスに喩えて自らの体験談を書き残している)。その上で、彼の教育理念が多面的で包括的な、しかも極めて个性的で独自に形態化された理念の世界となっていて、その中心的統一的役割を担っているのが彼の哲学であり、特に倫理学に他ならず、しかし同時にこの理念的世界が決して紙上の創造物ではなく、当時のナポレオンの席卷と言うドイツ国民の屈辱的、歴史的状況に制約されつつ、また彼個人の独自の精神的傾向とも合致して形態化された歴史的世界そのものに他ならない、としている(他方、Fichte (1762-1814) は『ドイツ国民に告ぐ』(*Reden an die deutsche Nation*) においてベスタロッチの教育精神を称揚しつつ、ドイツ国民を鼓舞し、ナショナリズムの意識を高揚させてナポレオンに精神的抵抗を行った)。

第二に P. ナトルプが、古代哲学者の中ではシュライエルマッハーと精神的傾向性を共有するのは、主としてプラトンであると指摘し、哲学と人生が相互に影響し合う相対的關係にあると、両者が共に理解していることをその理由として挙げているのは周知の通りである。しかし、それと共になお注目すべきは、P. ナトルプがプラトンと並んでシュライエルマッハーが思想的傾向性を親しく共にした哲学者としてライプニッツ (Leibniz, 1646-1716) を挙げていることである。その共通性はライプニッツの哲学にもシュライエルマッハーの哲

学と同様に「理念と現実、普遍と個別、また必然と自由、弁証法と経験、合理主義と歴史主義等々の調和と平衡」が探求されていることにある。要するに、両哲学者の類似点として「調和と総合」が見出されているのである。もっともナトルプも両者が完全に一致しているとは見なしているわけではなく、またプラトン程の重要性においてはではないことも指摘している。特に「調和」がライブニッツにおいては「完全に成就」されているのであるが、シュライエルマッハーにおいては「調和」は言わば「世界の無限の過程において初めて実現される総体として存在する」と理解されている。またそこからシュライエルマッハーの「自然の理性化」が決して完成されることのない倫理的観点として、彼独自の視点であることも挙げられる（『道徳学説』、81）。

以上のことから、第三に P. ナトルプはシュライエルマッハーの教育学にとって基本的な結論として、教育とは「完全に個人的な事柄」であるが、個人はまた同時に「共同体」に関係していなければならないと指摘する。この「個体」と「共同体」は倫理・道徳を媒体にして「相互に」に変化・交替しながらも自己実現を遂行・成就して行くのであるが、しかし両者はしばしば対立・矛盾に陥りがちで、そのため現実の社会・歴史的状況を媒体にしつつ、現状をより高次の段階への一歩と自覚して、不十分な現況を超克して理想を目指して変革・改善に努める必要があることを指摘する。そしてこのシュライエルマッハー教育学の基本的概念（「個体」と「共同体」）の具体的展開が「自発」と「受容」の二作用を通して行なわれて行く。即ち、個体は全ての現実の内容を共同体の生活から受容しつつ、その受容した現実の内容の全てを物質的にも精神的にも再度共同体に還元して行くことになると指摘し、「一にして全（*ἐν καὶ πάντων*）」の過程を教育の過程としてシュライエルマッハー教育学の特徴と明示している（プラトンの『シュンボシオン』の「自己革新」、またシュライエルマッハーの『モノローゲン』（=人間性の各自の仕方による表現は、各自の要素が独自の仕方ですら混合・混入されて成就される）、さらに『教育学講義』の「私が何者であるかは宇宙・普遍と私の関係、また「万物の懐」から私の自己創造を通して何者かに成る存在である」とか「自己の尺度の許容範囲は、何よりもまず望ましい道徳的全体との比較を通して獲得され

る」が引用されて、この様なシュライエルマッハー固有の思索的特徴に精通するために Rudolf・Haym の *Die Romantik-5 Auflag-*を参照するように教示している)。

その上で、第四に P. ナトルプはシュライエルマッハーの「共同体」に注目して、この「共同体の全体系・全組織」に従って「個体」との関係を具体的に検討・考察する。まず最初に国家共同体が「国家学」ないしは「政治学」の主体として取り上げられ、「教育学」との相互関係が共に「倫理学」を根拠にしなければならない、と指摘される。即ち、国家も教育も最終的に目指すところは個人と社会に即しての倫理・道徳の具体化に他ならない。その際に見落としなければならないことは、教育が国家に吸収し尽くされないことである。しかしこのことは単に国家と教育との関係のみならず、家庭、学問、学校、交友、芸術、宗教のすべての共同体に関しても同様である。言い換えると、これらの共同体は国家の機能としてではなく、むしろ各共同体は各自の社会的機能に従って、国家との緊密な関係を維持しつつも各々自主・独立して存在しているのでなければならない。共同体の概念の多面的把握と同時にまた個人的・個性的独自性の強調にこそシュライエルマッハー教育学と倫理学の秀逸性が観取されるのである(プラトンの「哲人政治論」に現れている国家と教育、即ち、教育が国家の事柄であり、国家が究極的に教育の諸課題の責任を担うことを目指している、というプラトンの主張に基本的にシュライエルマッハーの教育学も一致していることが言及されている)。

またプラトン哲学の基本的原理「正義と共に支配し、支配される」(『ポリティア』)と共に「教育の自由」と「学問の主導性」がシュライエルマッハーの根本原則として最も尊重されなければならないことを P. ナトルプが指摘しているのも注目しなければならないことである。前者に関して「家庭」も「学校」も共に独自の固有の使命を有するが故に、「国家」は可能な限り(緊急の事態、歴史的・社会的諸制約・諸条件下等々の場合を除いて)教育の自由を尊重するのでなければならない。後者に関して「学界」は全ての教育諸制度は言うまでもなく、国家をも指導して行く最高の頂点に存在すべき共同体として、諸共同体の内でも最も独立した共同体であることが、シュライエルマッハー教育学の

観点より原理的に指摘され、その観点からして、彼はコンドルセ (Marquis de Condorcet, Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, 1743-1794, 哲学者, 数学者, 1792年国民議会の議長として『国民教育計画草案』を構想・提示した) の先駆者の一人とも見なされている (拙稿, 『人文論究』40, 4号)。

さらにシュライエルマッハーにとっては、「学問」としてではなくむしろ「訓練」としてなお「交友」共同体があり、ここでの社会的交友を可能とする媒体を「社会的技芸」と呼称する。「技芸」それ自体は古代の「体操 (γυμναστική) と文芸 (μουσική)」に由来する概念であるが、シュライエルマッハーは前者の体操を身体的と精神的の二要素を統合する最も広範囲な概念として把握しているとの P. ナトルプの指摘は卓抜で、しかも極めて教育的 (絵画と音楽は感性の体操, 思考と対話法は精神の体操で, 文芸は言葉での教育すべてが該当する) でもある。その意味で「教育者とは技芸者なり」とも定義されるが、このような「交友」共同体の概念は F. シラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) に影響を受けたものであり、広い意味で「遊戯」の概念と一致して「遊戯」共同体と了解される。

ところで、最後に、P. ナトルプの宗教と宗教教育、特にここではシュライエルマッハーの宗教に対する彼の態度に注目しておきたい。勿論、P. ナトルプもまた宗教が人間性の本質的な構成要素であるが故に、宗教教育はこれからも永遠に行われ続けなければならない教育であることを十分に認めるが、一方では宗教教育が「人間の全ての文化と非常に緊密に内的な関連を維持している」ので、両者を切り離しては結局人類の精神的世界に跛行状態を招来することになるだけである」と宗教教育の意義を文化との関連で強調する。他方でより一層宗教の本質論に立脚して、宗教の根源は人間性自身の内に存在しているので、宗教と人間性との間に矛盾・葛藤が発生する場合、その調停もまた「人間性の限界内の宗教」に依存するものでなければならない、と宗教は終局的に人間 (人間理性) に踏み止まることになる。P. ナトルプは、「私はシュライエルマッハー学徒ではない。教育学が根拠とする哲学的基盤が問題となる場合には、

私はまず第一に常にプラトンとカントに言及する」と断言することからして、彼の教育学は言うまでもなく、宗教また宗教教育に関して、シュライエルマッハーの「絶対帰依の感情」には届かず、カントの「理性の限界内の宗教」をわが宗教・宗教教育とし、「理性的意志」の教育学こそわが教育学の神髄と見なしたことは当然至極のことと言えることになるのであろう。

(三)

上記の P. ナトルプは 1854 年生まれであるから、O. ヴィルマン (Otto Willmann, 1839-1920) とは 15 歳の年齢差があり、しかも前者はデュッセルドルフで福音主義信仰の伝道に献身していた牧師を祖父に持つのに対し、後者はポーランドのリサの地方裁判所所長の息子として誕生し、カトリック教徒の篤い信仰に生涯を通して生きた人物であるが、両者は哲学、教育学の大学教授として、年齢や信仰の立場を越えて緊密な親交を有していた。

O. ヴィルマンが「シュライエルマッハーの教育学に関して」(“über Schleiermachers Erziehungs lehre”), プラハの「ドイツ教育者協会」で講演を行ったのは 1875 年 1 月 23 日であり、彼は当時 35 歳でヘルバルト学派の一人としてプラハに招聘されていたのであるが、この時点で既にヘルバルトの教育学上重要な概念を乗り越えていた程に極めて大胆に自己の教育学的思索の展開を行っていて、その意味でシュライエルマッハーとの精神的対決（特にここでは宗教教育に関して）もまた彼の教育学的思索の発展・展開にとって重要な意義を有することになった。

O. ヴィルマンは 1839 年 4 月 24 日、ポーランドのリサ (Lissa) に地方裁判所所長ヨハン・ヴィルマンの息子として誕生した。彼はリサのギムナジウムに通ったのであるが、この学校はかつてあの『大教授学 (*Didactica Magna*)』の著者、ヨハン・アモス・コメニウス (Johann Amos Comenius, 1592-1670) が 200 年前に教鞭を取ったところであった。その後ブレスラウとベルリンで彼は哲学を研究した。そこでの彼の恩師は言語学研究者のスタインタール (Stain-

thal) と心理学者のトレンデレンブルク (Friedrich Adolf Trendelenburg, 1802-1872) であった。特にヴィルマンはアリストテレスの哲学に専念した。1862年に彼は哲学博士の学位を取得し、1863年には言語学と数学の専門領域で高等学校正教諭試験 (Oberlehrerprüfung) に合格した。1863年の秋、彼はライプティヒに赴き、チラー (Tuiskon Ziller, 1817-1882) の創設による大学の教育学研究演習の養成所に参与した。1864年の復活祭に彼はこの訓練所の教師になり、同時にまた彼はバルト (Barth) の教育施設の教師に就任した。ヴィルマンはヘルバルト教育学の創始者となったが、同時にまた彼はアリストテレスの哲学にも深く傾倒していった。1868年ヴィルマンはウィーンに赴いた。ここには教師の継続教育所が設置されていた。それは教師養成大学の予科 (Pädagogium) と呼称されていて、校長はディテス (Dittes) であったが、彼はこの予科に付設されていた訓練所の校長になった。自由思想家、ディースターヴェーク (Friedrich Adolf Diesterweg, 1790-1866) の創始者、ディテスと篤心のカソリック信仰者でありまたアリストテレス哲学の代表者であったヴィルマンの二人は全く異質の素質の持ち主であったため、直ちに確執が生じてきた。この様に異質な素質の持ち主をこの教育施設に招聘することが失敗の元であった。訓練所は成長・隆盛して行ったが、もっともヴィルマンは最初にヘルバルトの根本原則を実現して行ったが故に、不信を招く事態になった。これら両者間の個人的対立は次第に重大なものになって行った。1872年 (33才) ヴィルマンは正教授としてドイツのプラハ大学に赴任した。この大学で彼は真に多面的な活動を展開した。教育学の研究演習を創設し、沢山の重要な教育学的、哲学的仕事を遂行した。1903年 (64才) に彼は教授職を退いて、1910年 (71才) にはライトメリッツ (Leitmeritz) に転居して、ここで1920 (81才) 年7月1日に逝去した。

(四)

O. ヴィルマンは、シュライエルマッハー教育学が成立してくる当時のドイ

ツの精神的・歴史的状況の叙述から始める。即ち、当時、ドイツの教育的状況は、既に J. J. ルソーの『社会契約論』や『エミール』等の革命的、指導的思想に先駆された政治的、社会的分野の新しい状況の進展を背景にして、文学の領域における疾風怒涛の時期の如くに極めて過激で激烈な精神的混沌の中にあった。換言すると、既に J. B. バセドウを代表者とするような教育的運動が展開し新しい教育と制度の構築を要請していたが、その後 J. ペスタロッチの精神が名声を得て来ると共に、他方でナポレオン抑圧の時代にあつてプロシアの国家教育と民衆の再生を切望して民衆教育の実現が待望される中で、フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』（1808）が国家主義の原理を前面に押し出して、時代の教育諸問題の解決のために熱狂的な民衆を煽っていた。要するにその状況は相対立する諸原理、即ち、汎愛主義と人文主義、合理的啓蒙主義と歴史的信仰、世界主義的世界観と愛国主義的情熱、個人主義教育と国家主義教育の原理が激突して闘争を展開していた。

このような教育的状況下において、表面化していた諸矛盾や不平等などの困難な諸問題の解決のために重要な貢献をした人物として、F. D. E. シュライエルマッハーが取り上げられ、彼が包括的な知識と冷静で偏見に捕らわれない視野を持つものとして諸矛盾の本質に迫り、さらにそこに適切な統一をもたらす十分な理解力と多面的な思索の明敏さを備えた哲学者、教育学者、倫理学者であると共に、福音主義信仰に立脚した篤信の神学者であるとして高い評価が下されている。

そしてそのような彼の人格形成の基盤となったのが、一方で若き日の「ヘルンフト兄弟団」での生活と、他方で「古代ギリシア研究」であることが指摘されている（前者に関しては、シュライエルマッハーもまた探究精神と宗教的感情の宥和を自己の学問上のまた自己の心魂を導く活動の固有の課題と見なして、当時の合理主義の支配していた時期に苦闘を続けていた。後者に関しては、O. ヴィルマン自身もまたこの古典古代世界から十分な影響を受けていたのであるが——『教育者としてのアリストテレス』——シュライエルマッハーがローマン派の指導者達との交友を通して、古典古代世界を過大評価することから我が身を回避することができ、その結果彼は中世

もまた近世をも正当に評価し、特に古代の国民的状态に教育の万能薬を求めることなく、彼の生きた近代という時代の要求する文化生活とこの文化生活が教育に要求するもの全てを視野に収めて考察することができた。それは特に倫理学としてまた交友共同体と学問共同体に関する哲学的思索の成果として結果した)。もっともこの兄弟団では近代的学問、特に自然科学が軽視されていたがために、彼は学問的には決して満足できる生活とはなっていなかったし、また古典古代世界の研究、特にプラトン研究が彼の頭脳の全てを征服していた訳でもなく、例えば彼の『国家の教育への使命』が、基本的にプラトンの国家教育の理念に支えられていたものの、最終的にその様なプラトンの国家教育が専制化を招来する結果に終わるのではないかと、との懸念を寄せていたのは注目すべきことである、と教示する。

その上で O. ヴィルマンは、1849年にプラッツによって編纂されたシュライエルマッハーの『教育学講義』に基づいて彼の教育学の独自性を強調するのであるが、それは彼の教育学が「人間の使命」を具体的に教示し確定することができる点に存在している、と言う。その際に重要なことは彼の教育学が倫理学に根拠をおいていることであり、具体的には旧世代が若い世代を歴史的、倫理的社會共同体（国家ないしは市民共同体、教会ないしは宗教共同体、言語と認識の学問共同体、自由な交友共同体、の大規模な四領域に分類される）にまで主として精神的文化財を媒体にして導いて行くことである。

しかし、いずれの共同体も完全ではなく、従って若い世代を単に既存の共同体に導き入れて、欠陥のある共同体を受け入れさせるだけでなく、いわんや埋没させたりするのではなく、むしろ彼等が積極的に共同体の改善、修正に立ち向かって、可能な限り欠陥を除去したり対抗したりして行くことが出来る様に導いて行くのでなければならない。またいずれの共同体にも伝統と革新、普遍と特殊、全体と個体等々の二観点が必然的に存在している。従って、事態の真理を認識するためには一組として構成されている二つのものを分離するような過ちを犯してはならないと、警告してシュライエルマッハー独自の思考法、即ち、「二支的弁証法 (Dialektik)」の有効性を強調する。それはシュライエルマッハー独自の思考法の目指すところが、全ての事態が高次的観点より、統一

的、調和的、最善的に整序されて行くことにあるがために他ならない。教育活動のすべてはこの様な事態を招来させ実現して行くために存する活動に他ならない。ところが、O. ヴイルマンの見解に従うと、一般の教育学者や教育家の陥りやすい弊害として教育の技術的・方法的側面の重要性を過大評価することであると指摘して、その例証にペスタロッチの教育方法のあまりの楽観性を(教授学上の暗記学習が機械主義であるとしてシュライエルマッハーによっても既に批判されていた)批判する。そしてその上で教育方法の重要性は単に知識の詰め込みだけでなく、精神や感情のすべての諸能力を導き、支配することにあると主張し、ペスタロッチの教育方法を尊重しつつもなお、「人間の本質に根差した教育を行い、確実で強固で善良な意志の教育」(『ドイツ国民に告ぐ』)を行うことの重要性を強調したフィヒテに共鳴していることは注目すべきことであろう。

O. ヴイルマンは、シュライエルマッハーの教育方法に関してなお、「心術」と「技能」、「自由」と「規則」、の言わば相補・二重性の原理を指摘して、それぞれを上述の四つの社会共同体との関連で論及する。それぞれ前者が「非意図的」活動を必要とする領域とそこでの支配的原理であり、ここでは諸影響に関連と秩序を与え、不明確で脆弱な諸印象を明確で意識的、自覚的印象にまで高めるのでなければならないが、しかし単なる技術的、意図的方法是は無縁であり、いわんや機械主義は馴染まない領域である。またそれぞれ後者が「意図的」活動を必要とする領域とそこでの支配的原理であり、ここでは技能が進展・拡充して来るにつれて、「方法的、技術的」な明確な「意図的」方法が「規則」と連動して来るのでなければならないが、しかし極端な「杓子定規」の技術的機械主義によって縛り付けるような事態は勿論回避されなければならない。いずれにしても「ゆったりとした伸びやかな」教育活動が展開されるためには、「所与の状況の中で何が正鵠を得ているか」を適切に判断する必要があることになろう。そのために取捨選択された教育方法は教育活動と協力しつつ、精神活動の活性化や集中化、またより高度な関心事・興味への伝播、さらに自己活動と意志力の訓練や当面する諸課題を成就するために当事者を鼓舞・

激励し同時に自らの達成能力を高めて、活動範囲の拡大へと到るものでなければならぬ。

O. ヴィルマンがシュライエルマッハー教育学の独自性と卓越性を十分に認識しつつも、言わば九仇の功を一簣に欠と言わんばかりに、シュライエルマッハー教育学に「心理学的予備研究」の欠如を弱点として指摘していることにも注目しておく必要がある（勿論、シュライエルマッハーにも所謂近代科学的な意味での「心理学」ではないが彼なりの「心理学的考察」がないわけではない。例えば *Psychologie* を参照。Tredenbergs の門弟としての O. ヴィルマンとしては納得できない心理学的研究に他ならなかったものと考えられる）。

さて最後に、O. ヴィルマンの宗教観と宗教教育を特にシュライエルマッハーの宗教観との関連で考察しておきたい。勿論彼もまた、宗教が人間本来の根源に根差している事柄であり、従ってこの教育が本来的には「社会共同体を結び付ける最も完全な意味での社会共同体」である宗教共同体（教会）に所属する事柄ではあるとしても、同時に家庭共同体との有機的連係を維持しつつ行われる性格のものであると考えている。またシュライエルマッハーの宗教観（＝絶対帰依の感情）には彼（カトリック信徒）から見れば「客観性」、「超越性」、「神秘性」が欠如していて、単に時代の「汎神論的」混乱の中に陥っている、と規定している。そして両者のこのような宗教的見解の相違はまた必然的に両者の倫理・道徳観にも明らかに現れていて、シュライエルマッハーの所謂「自然の理性化」は「超自然的要素」の欠落の結果として「道徳的なものを文化の要素に見下して」、「決して終極点に至ることのない、安らぎも見込みもない単に生々流転するだけの状態に陥るに過ぎない」と、要するに「主観主義」へと到るに過ぎないと批判する。

彼は J. F. ヘルバルトの高弟として尊師の教育学・倫理学を尊重しながらも「その狭隘さ」の故に乗り越えて行かざるを得なかったし、またシュライエルマッハーの影響を大きく受けつつも、少なくとも道徳観・宗教観においては「超越」と「神秘」の要素の欠落の故に、彼をもまた乗り越えて行かなければならなかった（シュライエルマッハーの『キリスト教倫理学』も宗派・宗教的立場の

相違によって同様の見方に限定されざるを得なかった)。そこから O. ヴィルマンの哲学、教育学が「永遠の哲学」、「永遠の教育学」と呼称される所以が結果して来る。

P. ナトルプと O. ヴィルマンは上述のように一回りの年齢差があり、しかし、学問的交友として親交を持ち、また共に古典古代世界の価値観（真、善、美、正）を共有しながらも、シュライエルマッハーの宗教観に前者は「届かず」、後者は「超越」しているところに根本的相違が見出せるのであり、両者の教育観に関しても前者は「理性的意志」を、後者は「教養とは人間を自由にし、教授とは人間を道徳化する」ことである、と立場を異にしている。言うまでもなく、O. ヴィルマンの理想的世界観は「神の家に行こう。そこに平和があり、力が充実が堅固さが在る」（詩篇 122:1, イザヤ書 2:3, ミカ書 4:2）の内に厳然として存在している。